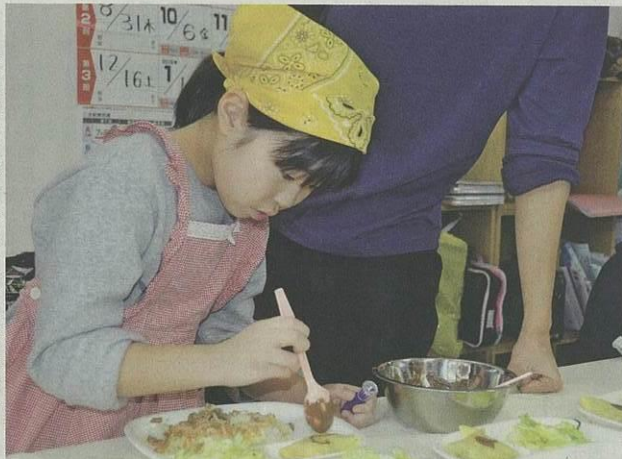


地域住民の「居場所」に

「子ども食堂」八戸開設1年

市内外に拡大、交流育む



参加者がみんなで調理をし、一緒に食事を楽しむ「あおば食堂」11日、八戸市

孤食や貧困対策、共食の場として、低料金または無料で食事を提供する「子ども食堂」の青森県南地方第一号が、昨年11月に八戸市内に開設されて1年が経過した。八戸学院大短期大学子ども食堂は2012年から始まった。大半は寄付で、東京を中心に開設の動きが広がっている。現在は4カ所にまで拡大。利用者が増え、地域住民の「居場所」として定着しつつある。(玉川那津美)

ティアが調理を担当。14年に国から子どもの貧困率が公表されるようになってから急速に全国に拡大した。一般的に子ども食堂の貧困対策の一つとして認識されることが多いが、誰でも利用できる多世代交流型や地域住民が一緒に楽しく食事を提供する「共食」の場として運営する団体が多い。

北奥羽地方では16年11月から5カ月間の佐藤教授の取り組みを皮切りに、今年3月に洋野町で「むつみ子ども食堂」、4月に同市白銀町の交流スペース「そよ風」の「みんなの食堂」、5月に同市柏崎2丁目「あおば食堂」がそれぞれ開設。7月には、県からの食育に関する委託事業として佐藤教授が同市のはっち内の「キッチンむらた」で再びスタートさせた。

いずれも月1回のペースで、利用対象を制限せず開催。調理体験やレクレーション活動、学習支援と組み合わせたなど、それぞれが独自に活動している。

このうち、佐藤教授の子ども食堂は友達同士で訪れる高校生や親子、仕事帰りのサラリーマン、子育て世代など毎回40人程度が利用。そよ風は、毎月20〜30人の地域住民が訪れる。子どもにとっては、一緒に食事や料理をすることで共食の楽しさを学ぶことができ、食育につながるなどの利点があるという。

主に高齢者の利用が多いそよ風では、市街から離れた地域特性を生かした食堂として機能。担当者は「利用者の中には一人暮らしもいる。新しい友達ができたり、外に出たりすることで気分転換になっているようだ」と話す。